

Eureka VI

六年制通信 No. 15 平成 30 年 9 月 15 日 (土) 号

独学のために

前回紹介した新井さんの本には、興味深い箇所がまだまだあるので、今回もこの本に触れたいと思います。それは新井さんが「大学入試は何のためにあるのか」という問いに答えているところです。これは、好きでもない科目をなぜ勉強しなければいけないのかという、誰もが一度は思ったであろう、しかも誰もちゃんと答えてくれなかったに違いない問いに対する答えということになります。(『AI vs. 教科書が…』 p.254~)

三角関数や微分・積分を勉強して、何になるのか。丸暗記した化学式は何のためか。そんなもの知らなくても、社会に出てから困ることはない。しかし、大学入試にははっきりとした機能がある。それは学生のスクリーニング (screening) である。この学生にはどの程度の能力があるのか、その能力を測る指標として大学入試は使われている。三角関数や微分・積分は一部の仕事を除き役には立たないが、それを理解できる能力や、理解できなくても公式を覚えて問題を解ける能力は、仕事でも有効で汎用性がある。また、役に立つかどうかはともかく、やれと言われればまじめに取り組む従順性や入試のためだからと割り切って努力できる合理性が企業は好きなのだ。学歴社会とは、要するに、企業が大学入試のそのような機能を見ぬいて、出身大学を就職希望者のスクリーニングに使うということに他ならない。以上が、新井さんの答えを要約したものです。

ちなみに汎用性の「汎用」とは「広くいろいろの用途に用いること」であり、「スクリーニング」とは「無作為の集合体の中から、特定の条件に合う、あるいは特定の基準をクリアする部分集合を選び出すこと」です。

新井さんの主張は明快でよくわかります。しかし私は、中高での勉強に限って言えば、また別の意義があると思っています。

小学校の時に鶴亀算を習います。鶴と亀が全部で何匹で、足が全部で何本だとすると、鶴と亀はそれぞれ何匹ですか、というやつです。あれ、未知数 x と y を用いて連立方程式を解けば、ほとんど暗算でできますよね。小学校でも未知数を教えればいいと私は思いますが、それはともかく、中学で未知数を教えることで、生徒たちに何を言いたいのか。それは、それまで教えられなかった未知数という概念を導入するとこんなにも簡単になるとか、この考え方は汎用性が高いとかいうこと以上に、つまり、子どもから青年期にかけて、まだ自分の知らない「ものの考え方」がたくさんあるということを教えているのです。これが大切だと私は思います。いわゆる成長段階における「自分がものを知らないということを知る」ステージに入ることは、知的好奇心

の発露につながりますものね。

さらに、受験勉強を通して、次の三点がわかります。一つは、自分の得意な分野と苦手な分野を知ることができる。自分にとっての「難易度」のようなものを知ることです。もう一つは、自分の集中力と理解力がどれほどのものかを知ることができる。最後に、自分には合理的精神があるかどうかを知ることができる。

これらは、やがて社会に出て、学校教育の場から離れて（授業を受けることがなくなっても）、独りで何らかの勉強をしなくてはならない場合（必ずこういう場面が訪れます）、つまり独学をしなければならない場面に大きな力を発揮します。

要するに、中高の勉強は独学できる力を身につけるためにあるのだと思っています。そのためには自分の得意不得意を知っていなくてはなりません。また、例えば初めて読む本でも、ざっと頁をめくってみて、その難易度をすぐ理解し、自分の集中力ならどのくらいで読破できるかを見抜かなければなりません。大切なところを抜き書きしてノートに取ることも必要でしょう。合理的ということは、身につける必要のある新しい知識に対して、それを短期間で得るために必要なものはどれかがわかり、それ以外の物を自分の目に入らないようにするなどの工夫ができるということです。これら全ては、まじめに受験勉強に取り組むことで身につけることができるでしょう。

さらに、独学できる力を支える最も大切なことが二つあります。この二つが身につけていけば、もう中高で学ぶことはないと言ってもいいとさえ、私は考えています。一つは知的正直であること。わからないことをわからないと言える心です。勉強に対して嘘をつかない心です。宿題をしていないのに「忘れました」とか、ごまかさない心です。あと一つは、いつも言っているように、辛抱強く学ぶ意欲に他なりません。

今週のおすすめ

・重松 清 『小さき者へ』（新潮文庫）

六つの短編集です。連作ではありません。独立したお話です。主人公は小学生からせいぜい中学2年生くらい。この作者は、毎回思うのですが、子どもの心理描写が本当に上手ですね。子どもの抱えるさまざまな葛藤や周りの大人の戸惑いを、あるいは仕草で、あるいは言葉で、リアルに描いていると思います。子ども同士の会話にしては、やや現実より理路整然としすぎている（つまり大人びた会話になっている）のですが、私たち読者にわかるようにするには仕方ないのだと思います。

私たちの年齢になると、自分が小さき者だった頃の気持ちがどんどん思い出せなくなってきます。親御さんもそろそろ忘れかけていらっしゃるかもしれませんか。この本は、私は保護者の皆さんにもおすすめしたいと思います。子どもが考えていることなど、時がたてば変わっていく。子どもの悩みなどたかが知れている。これは私たち大人が経験則から、しかも大人になってから言うことです。子どもは、いくら幼くても、今が人生の頂点なのだから、これから先の自分の考えを知ることはできません。今が精一杯の感情だし、それしかないのだし、だから、私は子どもの悩みを馬鹿にしません。

BGMは RADWINPS の 心臓 でした…。